

PRESS COLLECTIVE

— Late Summer 2020 —

collective vol.48
5th September 2020
@event space 雲州堂



http://collective-music.com/

edit: tawaki text: kengomatsui, itaru wakui, 楠田行展, tawaki design: yukiokimura.com

Playlist `Beans of POUR-OVER BEATS、解説

皆様も、collectiveにお越しいただきありがとうございます。おかげさまで16周年を迎えた2020年我々はノール部門、collective productionsを立ち上げ、私、KMA a.k.a. KENGOMATSUIのアルバム`POUR-OVER BEATS、をアナログLPと配信にてリリースしました。合わせてアルバムモードやグルーヴ感のレファレンスとも言える楽曲を集めたプレインスム`Beans of POUR-OVER BEATS、をApple MusicやSpotifyで公開しております。今回は、プレイリストの楽曲解説にて、アルバム紹介に代えたいと思います。

Thomas Fehmann `Lindt、

レイドバックしたビート。私の好きなBPM 100付近。タビータな浮遊するシンセサウンド。私にとっての理想の楽曲のひとつです。

Andras Fox `Soft Illusion、

この人の柔らかく朴訥とした音の質感やシンブルなビート、ゆったりとしたグルーヴ、これ見よがしなところが、ない展開に惹かれます。宅録的なシンブルさとアナログな音の質感の音楽は、とても好きです。

KRAFTWERK `Expo 2000 (Klang Mix 2000; Radio Mix)、

私にとっての神様、KRAFTWERKの1999年リリースのシングル。

2000年ドイツ、ハノーヴァー万博テーマソング。なめらかなスーパーソロ映像のような音楽だと思えます。風景がスローモーションのようになる音楽は、私の理想的な音楽のあり方。テクノ×ヒップホップ的なスタイルで好きです。

Jay Dee `Think Twice、

Donald Byrdの軽やかに飛ぶような原曲を、足を引きずるような、脱臼したような、ダレレイドバックしたグルーヴでカバー。このうっかバリのあり方は、私のアルバムでの、`Feel Like Makin' Love、や`The Whistle Song、のカバーのやり方に影響しています。Dillaの揺らぐビートの打ち込みには大きく影響を受けています。

Jose James `Save Your Love For Me、

ドラムは、Richard Spavenの。イントロから顕著ですが、いくぶんたどたどしいようなゆるんだビートを叩いています。ピアノも同様にわざと下手っぽいようなズレを含む弾き方をしています(ソロパートに顕著です)。グルーヴの魔法ー影響大。

菊地雅晃 `Potency、

「Pーさんの甥」として知られるジャズベーシスト。イントロで錯覚を感じさせるリズムの妙から、テーマに入ったところからのアーバンメロウな抜けた感。緩やかなグルーヴとシルキーな耳障り。表現したいもののひとつです。

Flako `Crying On The In、

Flako 作品では、「こんなにリズム

がブレブレなのに、こんなにカッコよく成立してしまうものなのか」と多々思われ、グルーヴのブレ・ゆらぎへの確信を深めました。

Takecha `Deep Drive、

Takecha さんのLP `Deep Loops、の1曲目だった曲で、私のtakechaさんの曲の印象はこれ。エレビのコードに、ビートクラッシュ系のエフェクトをかけて、デジタル的なザラつきや焦げたような質感を出す手法は当時自分もよく使っていたので非常に共感しました。この曲は淡々とした煽るところのなげ展開で浮遊感のあるハウスです。Takecha さんが`Deep Loops、をLPでリリースしていたことは確実に今回のLPリリースに影響しており、リリースに際してサイトにコメントを寄せていただくことができ大変感謝しております。

Nightmares On Wax `Argha Noah、

彼らのダウンビートは、今頃になって妙に心地良く感じられるようになりました。私のアルバムの1曲目のタイトルは、彼らの`Smokers Delights、というアルバム名から拝借。

Underworld `Dune、

もう誰もUnderworldのことなんて覚えていないのではないかと思うような2019年にリリースされた曲。トゲトゲしいところがなくならから、暗いような明るいような、浮遊感に浸る11分間。このうっか何も起らないまま流れていく音楽をやりた。そして私はカール・ハイドの声が

好きです。

白石隆之 `On A Distant Shore、

白石さんのことは、その昔、紙の雑誌だった頃の`eleking、で見かけていた頃からずっと気になる存在で、テクノでもありブレイクビーツでもあり、中間的なサウンドのセンスに惹かれていました。この曲もゆったりと、あまり展開もなく、質感とグルーヴの流れで聴かせてくれます。

D.A.N. `SWB (AOKI Takamasa Remix)、

AOKIさんは私が最も好きで影響を受けたミュージシャン。このリミックは曲は理想的な1曲。BPM 100付近という私の最も好きなテンポ。包み込むような低音のグルーヴにシンセの上モノ、無限に聴ける極上のリズムループ。棘のある音がなく、煙や香りのように空気中に漂うようなムード。ダブ・テクノ・ダウンビート・ポップ、いろいろな要素が含まれてる。

細野晴臣 `薔薇と野獣 (New ver.)、

2019年に僕がApple Musicで一番聴いた曲。D'Angeloみたいな色気のあるファンキーさに、柔らかな上モノとボーカルの質感。さらっと軽く流すようなムードですが、すごいグルーヴがあり、永遠に繰り返して聴いてしまう。オリジナルよりもずっと好きです。さすがと感服しました。



spotify



Apple Music

POUR-OVER BEATS

リリース2024年

itaru wakui



みなさま、ひさびさになりました collective へようこそ。今回はふたつの点でこれまで以上に特別な集い感じます。ひとつには世を席卷するコロナというネガティブな要因。かたやもうひとつはとてもポジティブな意味。そうです、KMA a.k.a. KENGOMATSUのレコードリリースを言祝ぐためのパーティーだからです。

緊急事態宣言が解かれる頃、われわれメンバーはみなさんより一足先にレコードを受け取りました。しばらく家で音楽を聴くことも少なくなっていたわたしは「新譜なんていつ来だろっ」となごと思いつつ、さっそくターンテーブルに載せました。そして、そこからしばらくのあいだ、pour-over beats はわがSL1200MK3上を何周も回り続けることになりました。

KMAの楽曲は都市のイメージとともにあるように思います。楽曲に

街や通りの名前を使うことにもそれはあらわれています。ライナーノーツで佐藤さんが阪神間モダニズムを感じたというの、おそろしく都市の情景とともにある音楽と「うつつ」を指しているのでしょうか。

ここでこんな音がなっていたら、あるいはここにはこんな音が似合う、そういったイメージがおそろしく作り手のひとつのきっかけとして重要なんだろうと感じます。B-1のMIDNIGHT IN AKASAKA、MITSUKEなる曲があります。わたしには赤坂見附は未踏の土地です。どんな街か知りません。でもこの曲がイメージのきっかけを与えてくれます。

街へ繰り出しうろろろ、ぶらぶらというただそれだけのことができないだけで、音楽を聴こうという気持ちがかんぱん磨り減っていくんだなということをしみじみと実感させられる日々。そこから脱するためのリハビリとしてわたしにとってこれほど最適のアルバムはなかったでしょう。最後にあらためて、レコードリリースおめでとう、KMA。



プロレスレコード

楠田行展

最近、プロレスにまつわるレコードを買うことが多い。各選手のオリジナル入場テーマ曲はもちろん、イメージソングやレスラー自身が歌ういわゆる「プロレス歌謡」、外国人選手の入場曲として使用された大物ロックバンドのものまで躊躇せず手を出している。

僕はプロレスが好きで、1990年代、テレビ中継を熱心に観戦し流れを追っていた。pres collectiveでも三沢光晴さんがリング禍で亡くなったときや、「絶対王者」「鉄人」と言われた小橋建太選手が引退した際には記事に記してきた。2人はジャイアント馬場さんの団体、全日本プロレスを90年代に支えた名選手である。三沢、小橋に川田利明、田上明の2選手を加えた「全日本プロレス四天王」は当時、激しく高度な試合展開でプロレスファンを魅了した。

個人的には鋭い蹴り技が持ち味の川田利明が大のお気に入り、全日四天王にはたくさんのお金をもらった。僕がテレビ中継を見ていない90年代以前のプロレス界と、音楽業界の関わりについて少し振り返ってみる。70年代後半から80年代はディスコミュージック、フュージョンに勢いがあつた時代。そして、それはプロレス界にも当てはまる。天龍源一郎の入場曲は高中正義の「サンダー・ストーム」で、ジャンボ鶴田さんの

テーマ「」はコルゲン・バンドの鈴木宏昌が作ったもの。坂本龍一らが作った「カクトウギのテーマ」は全日本プロレスで使用されていた、スタン・ハンセンの「サンライズ」は新田一郎率いるスペクトラムの楽曲で、平沢進が異母犯抄の名義で長州力の「パワーホール」を（嫌々）作曲したのは有名なエピソードだ。往時、プロレス界で時代感を反映した楽曲が使用されたのは、上り調子のプロレス界と、時代そのものの勢いが正比例していたからと見ている。

プロレス界はその後、テレビ中継が深夜枠に移行した90年代、総合格闘技の台頭により人気が低迷した2000年代、オカダ・カズチカラ人気レスラーが牽引して「ブ女子」を生み出し人気を回復した2010年代を経て現在に至る。コロナ禍の今、興行が以前のようにできない状況と闘っている。

完全な終息はないコロナ下で、自身の感情はどうか。高揚感のある曲、感情が鼓舞されるレコードをどうしても聞きたくなる。先頃、川田利明がスターダムにのし上がる頃に、入場曲として使っていたレコードを手に入れた。件のレコードを意識し、手に入れるまで2年半。念願のレコード奪取を機に、満を持してザ・グレート・コハクの参戦と相成ったわけである。今回の5分1本勝負を控えたコハクの心境は、チャンピオンサイドの赤コーナーにはなく、チャレンジャーが登場する青コーナーにある。挑戦者として「勇気の出るレコード」を完全燃焼で掛ける。

Share the Light

照る野郎Aチーム



カクバリズムの人気バンドの最新アルバム。初めて思い出野郎Aチームの楽曲を聴いた時の第一印象は「演奏は最高だけど、声がああ……」というものでした。確かに野太いダミ声で決して巧くないのだけど、この声だから届くソウルがあることに気付くのに時間はかかりませんでした。

SHARE THE LIGHTは分断されがちな社会の闇を描きつつ、しっかりと希望の光を照らす楽曲群で構成されています。自分が大好きな70年代前半米国のニュー・ソウルと近い雰囲気をもった素晴らしいアルバム。めでたくアナログ盤も2020年にリリースされています。とにかくリリックが素晴らしいので、できればフィジカルで入手していただき、歌詞カードを見ながら一緒に歌ってみてください。

(tawaki)